

ὁ Χριστὸς Ἰησοῦς

イエスは預言者です

ベレーシート

(1) 「イエス・キリスト」という表現は、「イエスがキリストである」という初代教会の信仰告白

●私たちがしばしば使っている「イエス・キリスト」ということばは、「イエスはキリストです」という初代教会の信仰告白です。その頭に「主」ということばをつけて、「主イエス・キリスト」という言い方もします。

「主」はローマの皇帝に使われる称号「キュリオス」(κύριος)で、ヘブル語の「アドナイ」(יהוה)を意味します。「イエスはキリストである」と告白する者が、「キリスト者」と呼ばれたのです。

●「イエス・キリスト」ヘブル語では「イエシュア・ハマシーアツハ」、ギリシャ語では「イエスース・クリストス」、英語では「ジーザス・クライスト」(Jesus Christ)と言います。「イエス・キリスト」というのは、イエスが名前(固有名詞)で、キリストは苗字ということではありません。

「キリスト」は職名です。ちなみに、「ヨセフの子イエス」とあれば、苗字に相当するのは「ヨセフの子」の部分です

●「キリスト」とは、神の働きのために特別な力と権威を授けるために「油注がれた者」を意味します。旧約では、「王」「大祭司」「預言者」にのみに、任職の油が注がれました。したがって「イエス・キリスト」とは、イエスが神からの任職の油を注がれた「王」であり、「大祭司」であり、「預言者」という告白的表現なのです。初代教会においては、「イエスがキリストであった」ということが「福音」(良き知らせ)でした。この福音が人々をいやし、解放し、罪の赦しをもたらすことから、「救い主」とも言われているのです。「救い」は「福音」からもたらされるのです。

●イエスをご自分の弟子たちに、「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」と尋ねたとき、弟子の筆頭であったペテロが答えました。(マタイ 16 章 16~17 節)

16「あなたは、生ける神の御子キリストです。」17 するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。並行記事として、

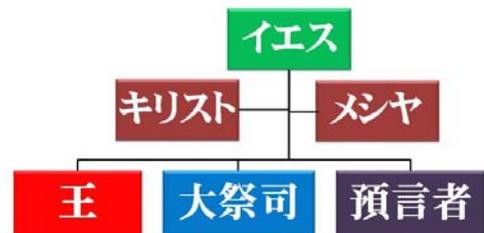
(1)マルコの福音書 8 章 27~30 節・・・「あなたは、キリストです。」

(2)ルカの福音書 9 章 18~20 節・・・「神のキリストです」とあります。

※いずれも「キリスト」という言葉が共通しています。これが共観福音書の前半のテーマです。

●共観福音書の後半のテーマは、上記にあげた前半の結論、すなわち「あなたはキリストです」の直ぐ後に記されています。何度も繰り返して出てきます。キリスト(メシヤ)の苦難と栄光が綴られています。つまり、キリストは栄光に入る前に必ず苦しみを受けるということです。これは聖書(旧約)全体の中に預言されていたのですが、弟子たちはだれひとりとしてそのことを悟る者はいなかったのです。

●「イエスはキリストです」という告白は、イエスこそが旧約の中で約束されたメシヤとして、その実現者(完



結者)として遣わされたということです。これが初代教会の「福音」(良きおとずれ)に対する考え方でした。

(2) 初代教会の「福音」の宣教に関する記述

初代教会を代表する二人の使徒—ペテロとパウロの伝えた福音をみてみましょう。

●使徒ペテロ

① 使徒 2:36

「・・・イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」

(「しかし、神は、この方(御子、メシヤ)を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。・・・私たちはみなそのことの証人です。)(使徒 2:24)

② 使徒 3:20

「それは、主の御前から回復の時が来て、あなたがたのためにメシヤと定められたイエスを、主が遣わしてくださるためなのです。」

③ 使徒 5:42

「そして、毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。」

●使徒パウロ

① 使徒 9:22

「しかしサウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。」

② 使徒 17:2~3

2 パウロはいつもしているように、会堂に入って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた。3 そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、「私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリストなのです」と言った。

③ 使徒 18:5

そして、シラスとテモテがマケドニアから下って来ると、パウロはみことばを教えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちにはっきりと宣言した。

④ 使徒 28:31

大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

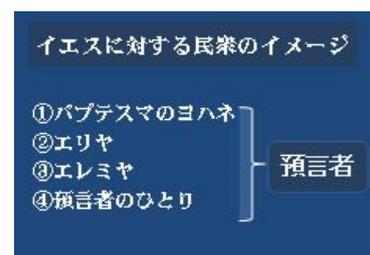
●伝道者アポロ

使徒 18:28

「彼は聖書によって、イエスがキリストであることを証明して、力強く、公然とユダヤ人たちを論破したからである。」

1. 人々はイエスをどのように見ていたか

●イエスの一行がピリポ・カイザリヤに行かれた時、イエスは弟子たちに尋ねてこう言われました。「人々はわたしのことをだれだと言っていますか。」と。弟子たちの答えによれば、右の図にあるように、「バプテスマのヨハネ」とか、「エリヤ」「エレミヤ」の再来とか、あるいは「預言



者のひとり」と言っているとイエスに言いました。ここにあげられている名前はすべて預言者の名前です。つまりイエスは、旧約に登場した預言者のイメージとして人々の目に映っていたのです。

他にも、イエスの公生涯において、人々がイエスを「預言者」とであるとみなしていたと分かる多くの記述があります。たとえば、以下がそうです。

●ルカ 7:16

人々は恐れを抱き、「大預言者が私たちのうちに現れた」とか、「神がその民を顧みてくださった」などと言って、神をあがめた。(ナインの町の人々がイエスのことを「大預言者が私たちのうちに現われた」と言っています。なぜなら、イエスがエリヤやエリシャが行ったのと同じ奇蹟をしたからでした。)

●マタイ 21:46

それでイエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と認めていたからである。

●ルカ 24:19

イエスが、「どんな事ですか」と聞かれると、ふたりは答えた。「ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行いにもことばにも力のある預言者でした。」(エマオの途上の二人の弟子)

●ヨハネ 4:19

「先生。あなたは預言者だと思います。」(サマリヤの女)

2. イエスは自分をどのような者として公言されたか

●ルカの福音書 4章 24～27節において、イエスは「預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」と言って、自分をエリヤやエリシャになぞらえ、自分は預言者だと公言しています。また、同様の主張は、ルカの 13章 33節で「預言者がエルサレム以外の所で死ぬことはありませんからです。」と言った箇所にも見ることができます。

3. 預言者とはどのような者か(預言者の霊性)

●ところで、「預言者」とはどのような務めを与えられた者をいうのでしょうか。今日、自分の将来が不安なため、多くの人が自分の運勢を占い師に見てもらったりします。これは一国の運命を左右する政治家たちもそうするのです。将来起こることを語る者に対しては、「予言者」という字を書きます。しかし「預言者」という場合には、言葉を預かるという意味で「預言者」ということばを使います。それは、単に将来起こることを語るというだけではなく、神のことばを預かり、神の代弁者として語り伝えるという特別な務めを与えられた者のことです。

●イスラエルの歴史において、イスラエルの父祖アブラハムは神から「預言者」と言われていました(創世記 20:7)。アブラハムはどのような意味において、神から「預言者」と言われたのでしょうか。その答えは申命記 34章 10節にあります。そこには「モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼を【主】は、顔と顔を合わせて選び出された。」と記されています。つまり、預言者とは、「顔と顔を合わせている者」であり、「神との親しいかわりを許されている者」、それゆえに、「神の隠された秘密を知っている者」、また「その秘密を人々に伝えるために神から信頼に値すると認められた者」といった意味なのです。「預言者」に共通している特徴があります。それは、自分に与えられたことばが自分のものではなく、神から

のものであり、それを他の人々に伝えるために受けたのだと確信しているということです。

そのような預言者のひとりであるモーセがその生涯の終わりにこう語っています。

申命記 18 章 15 節

あなたの神、【主】は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。

●ちなみに、この申命記 18 章 15 節のことばは、使徒の働き 3 章 22 節でそのまま引用され、かつ「その預言者に聞き従わない者はだれでも、民の中から滅ぼし絶やされる。」という言葉も付け加えられています。この付加されたことばは申命記 18 章 19 節からの引用と思われるが、正確には、「わたしの名によって彼が告げることばに聞き従わない者があれば、わたしが彼に責任を問う」(新改訳)とあります。内容は同義と言えます。

●ここで、「私のようなひとりの預言者(単数)」とは、「主と、顔と顔を合わせるような預言者」のことです。第二のモーセ、つまり、メシヤ的人物である「終末の預言者」を指すものと解釈されています。つまり、御子イエスのことです。御子イエスは永遠に「御父のふところにおられた方」です。そして遣わされたこの地上で、いつも御父と密接なかかわりを持っておられました。それは「顔と顔を合わせている」関係です。それゆえ御子イエスが、自分の語ることばはわたしのものではなく、御父のもの、わたしを通して御父が語っているのだと言いました。一切、それに付け加えることなく、自分流に解釈したり、注釈したりすることなく、御父の隠されていた御思いをありのままに語ったのです。

●申命記 18 章 20～22 節は預言者に対する神の厳しい言葉が記されています。

20 ただし、わたしが告げよと命じていないことを、不遜にもわたしの名によって告げたり、あるいは、ほかの神々の名によって告げたりする預言者があるなら、その預言者は死ななければならない。」

21 あなたが心の中で、「私たちは、【主】が言われたのでないことばを、どうして見分けることができようか」と言うような場合は、

22 預言者が【主】の名によって語っても、そのことが起こらず、実現しないなら、それは【主】が語られたことばではない。その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼を恐れてはならない。

●エレミヤ書 28 章にはエレミヤに対抗する預言者ハナヌヤのことが記されています。両者は真っ向から多入りします。後者のハナヌヤが語った預言は、「主はバビロン王の軛を打ち砕き、二年のうちに、神殿から略奪された器具と捕囚された者たちを帰らせる」というものでした。それに対してエレミヤは、「バビロンの王に仕え、そして生きよ。神殿の器具はバビロンに運ばれるが、主が顧みる日までそこに保管される。しかし時が来ればそれらをもとの場所(エルサレム)に帰らせる(27:22)」でした。ハナヌヤは、平和を説いて民に偽りの希望を抱かせた罪により、なんと二か月後に死んだのでした。

4. 預言者としての神の切り札である御子イエス

【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙 1 章 1 節～2 節

1 神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、

2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。・・・

●ヘブル人への手紙の著者は、神が預言者を通して、長い歴史の中で、そのときそのとき、またさまざまの形

で繰り返し、繰り返し語られたと記しています。イスラエルの歴史において預言者たちが最も多く登場した時代があります。それは、神によって立てられたはずのイスラエルの王たちが神の道から逸脱していった時代でした。そうした時代に神によって立てられた預言者が神の代弁者として厳しいことばでその逸脱を非難し、神の道に立ち返るようにと諭したのです。それが旧約聖書にある「預言書」という形でまとめられています。大小あわせて 17 巻あります。そこには、いろいろな時代に、いろいろな預言者たちを通して語られた神のことばが記されています。

●しかし、預言書は単に語られた時代の人々にだけでなく、本来、預言者は神の隠された秘密を明かされた存在ですから、語られた人々の理解を越えた神のご計画も同時に語られているのです。ですから、預言書を深く学ぶことで、隠された神のみこころ、神の深い遠大なご計画を知ることができるのです。

●ヘブル書 1 章 2 節に「終わりの時」とあるように、神のご計画においては、イエスの登場は「終わりの時」なのです。つまり、最終的な、神の切り札としての代弁者なのです。しかも単に「語られた」だけでなく、「わたしを見た者は、父をも見たのです」(ヨハネ 11:9)と語られたように、神(御父)を「見せた」という点においても他の預言者にはない、実にユニークな面をもった預言者、それが御子イエスなのです。

しかし、神の民とされたイスラエルは、あらゆる時代において、神から遣わされた預言者のことばを信じることがありませんでした。マルコの福音書 12 章 1~12 節に記されている「ぶどう園と農夫」のたとえはその事実を語っています。そのたとえ話をみてみましょう。

- 1 それからイエスは、たとえを用いて彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を造って、垣を巡らし、酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。
- 2 季節になると、ぶどう園の収穫の分けまえを受け取りに、しもべを農夫たちのところへ遣わした。
- 3 ところが、彼らは、そのしもべをつかまえて袋だたきにし、何も持たせないで送り帰した。
- 4 そこで、もう一度別のしもべを遣わしたが、彼らは、頭をなぐり、はずかしめた。
- 5 また別のしもべを遣わしたところが、彼らは、これも殺してしまった。続いて、多くのしもべをやったけれども、彼らは袋だたきにしたり、殺したりした。
- 6 その人には、なおもうひとりの者がいた。それは愛する息子であった。彼は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう。』と言って、最後にその息子を遣わした。
- 7 すると、その農夫たちはこう話し合った。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺そうではないか。そうすれば、財産はこちらのものだ。』
- 8 そして、彼をつかまえて殺してしまい、ぶどう園の外に投げ捨てた。

●このたとえ話に出てくる登場人物について

- ①「ある人」とは、神ご自身のこと
- ②「自分のぶどう園」とは、神の民イスラエルのこと
- ③「農夫たち」とは、イスラエルの指導者たちのこと
- ④「しもべたち」とは、神から遣わされた預言者たちのこと
- ⑤「ある人の愛する息子」とは、御子イエスのことです。

●繰り返し、繰り返し、ご自分のしもべを遣わしたぶどう園の主人、そして最後には、自分の愛する息子を遣

わしました。見通しのきく主人であれば、最初のしもべが「袋叩きにされ、手ぶらで帰ってきた」ときから、すでにもう先を見越したに違いありません。ところが、二度目のしもべは「頭をなぐられ、はずかしめ」られます。三度目のしもべは「袋叩きにされ、しかも殺され」ます。にもかかわらず、なおも最後の切り札として、「自分の子なら敬ってくれるだろう」と思い、自分のいのちそのものである自分のひとり子を遣わします。すると、その農夫たちはこう話し合った。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺そうではないか。そうすれば、財産はこちらのものだ。』と。そして、彼をつかまえて殺してしまい、ぶどう園の外に投げ捨てた。のです。考えてみれば全くおかしい話です。まさに愚かで異常なぶどう園の主人の行動です。しかしその愚かしさの中に、異常さの中に、神の愛があるのです。神の愛は私たちの理解をはるかに越えているのです。このたとえ話は当時の指導者たちに対して特に語られたものです。

ルカ 13 章 33~34 節

33 だが、わたしは、きょうもあすも次の日も進んで行かなければなりません。なぜなら、預言者がエルサレム以外の所で死ぬことはありませんからです。』

34 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者、わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。

●しかし、先のたとえ話は最後の息子が殺されて、ぶどう園の外に投げ捨てられたことで終わっていません。続きがあります。マルコの福音書 12 章 9~12 節

9 ところで、ぶどう園の主人は、どうするでしょう。彼は戻って来て、農夫どもを打ち滅ぼし、ぶどう園をほかの人たちに与えてしまいます。

10 あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちの見捨てた石、それが礎の石になった。

11 これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである。』

12 彼らは、このたとえ話が、自分たちをさして語られたことに気づいたので、イエスを捕えようとしたが、やはり群衆を恐れた。それで、イエスを残して、立ち去った。

●『家を建てる者たちの見捨てた石、それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである。』詩篇 118 篇に引用されていることばですが、このことばを読んだことがないのかとイエスは指導者たちに言っています。彼らが見捨てた石、その石を神は家を建てるうえでなくてはならない最も大切な石、永遠に価値のある礎の石とした。という意味です。これはイエスの復活に言及していることばです。ユダヤの指導者たちに象徴される人間は、神を恐れることなく、自分のたちの立場を守るために、神から遣わされた切り札である御子イエスを拒絶し、葬ったのです。

●しかし、この話は、異邦人である私たち一人一人に対しても語られていると思います。主人が遣わしたしもべに対する拒絶は、結局のところ、人間は自分を神とし、自分勝手に生きたいと願っているところからきています。どこまでも自分中心であろうとする人間の罪深さが、最後の切り札である神の息子を拒絶して十字架につけてしまったのです。ここに私たち人間の奥深い罪があると言えます。

●神はこのイエスを死からよみがえらせました。ですから、私たちはこの方、神の最後の切り札として遣わさ

れたイエスのことばに耳を傾けなければなりません。このイエスの語られたことばは神のことばです。御父のことばそのものです。そしてそれは私たちにひとり一人に対する愛の呼びかけです。私たちを、神に造られた者として、本来のその栄光に満ちた姿へと造り変えようとする神のラブ・コール(愛の呼びかけ)です。私たちが、当時の人々と同じく、このイエスを拒絶することがありませんように。イエスの語ることばによくよく耳を傾け。その真意を悟ることができますように。そして、イエスの友となって神の秘密を知る者になりたいと願います。

最後に

●イエスのことばはユダヤ的・ヘブル的背景をもって理解しなければなりません。イエスの語ったことばはユダヤ的・ヘブル的背景をもって語られたことばだからです。そうした背景を知らずに、自分の理解の型紙で理解しようとするとなかなか理解できません。ですから、腰を据えて、ゆっくりと、じっくりと学ぶ必要があると言えます。神を熱心に「尋ね求め求める者」に、神は必ず神の国の奥義を明かして下さる方だと信じます。